



- 日 時：平成27年8月9日（日）
- 会 場：大阪府鍼灸師会館 3階
- 講師：日本鍼灸研究会代表 篠原 孝市 先生

## ◆『古典鍼法の手技について』

### I 中国古典医学の鍼法と手技より一部を抜粋

#### 総説

刺法というのは、選穴の後に生まれてきたと言ってもいいものです。それは、鍼灸の色々な古典を見るとほとんどがつぼの本で、つぼに部位と主治病証が書いてあるという、ほとんどがそういうものです。鍼の刺し方というのは、それだけが別の本に書かれているというのがありますので、そういう意味でも、選穴優位という風に来ているのではないかと思います。しかし、それには理由があるわけでして、鍼の刺し方というのは誰でもわかっていることですから、鍼のための診察というのがまず大事です。古典的にいえば臓腑や経絡、病態の診察、そういうものになります。

古典的な診察には古典的な診察法というのがあります。古典的な診察法というのは決まっているわけです。代表的なものは脈をみることと、症状をみることです。ずっと後の時代に、腹診と舌診が加わるのですが、中心になるのは脈をみることと、症状をみることです。それがまず必要であるということになります。もう一つは「つぼを選ぶ」、選穴ですね。この選穴も、どういう風に穴を選ぶかということ、歴代の大変な問題と言えます。つぼは、いっぱいありますから。手足のつぼだけでも約120穴、全身では約360穴、これだけのものがあるって、ぐっと縮めて、江戸時代も日本の流派みたいに100穴ぐらいにする。あるいは70穴ぐらいにする。数を縮めてもこれぐらいのつぼがあるわけで、それを診察に基づいてどこを選ぶかというのは、意外と難しい問題だということになります。それから施術法ということになります。

古典的にということになると、手技が診察と結びつくということが絶対に必要となります。どんな手技を使うのか。たとえば鍼を刺して、置いておく（置鍼）というのがあります。あるいは散鍼とか皮膚鍼とか接触鍼というのがあります。ここは置鍼をする、ここは散鍼をするというのがあるわけですね。例えば体が暖かい時、冷たい時に散鍼と置鍼のいずれを使うのかということなのです。

しかし暖かい、冷たいだけではなくて、色々な症状がありますね。たとえば、めまいがしている時、膝が痛くて腫れている時、肩が上がらない時に置鍼と散鍼のどちらがいいのかという事があります。具体的な問題になると置鍼なのか散鍼なのかというのは意外と決まっていないという感じがします。

①鍼法のための診察 ②選穴 ③施術法 鍼法を論じるにはこの三つが無いといけません。

古典的な鍼法というのは、誰かが何かをやっていて、すごく効いたというのではなくて、古い時代の書物にある鍼法はということです。その鍼法を『素問』と『靈枢』で読むと色々なことが書いてあっても、大体は五つぐらいの要素に分けることができます。



最初に鍼の心得というものがあります。これは、非常に難しい仰々しい文章で書いてあるのですが、おそらく2000年前にはよく理解できなかったかもしれないような内容で書かれています。文学的でもあります。鍼の心得というのは、たとえば「持針の道、堅き者を宝と爲す。正して指して直に刺す、左右に針すること無し（『靈枢』九針十二原篇）」みたいな心得というものがあります。

二番目が補瀉、三番目が繆刺（巨刺）、わかりやすくいえば左に症状があれば右に、右に症状があれば左にということですが、これも実は単なる反対側治療ということでは無く、診察が実はあるわけです。繆刺ならば繆刺の診察法というのがあるわけです。

四番目は各種の鍼法です。これは、もう今は行われなくなりましたが、九刺などがあります。そして最後が九鍼ということになります。九鍼というのは、私の考え方ではこれも鍼法の一つである。鍼（道具）に仮託された手技手法の名前である。

本来『素問』や『靈枢』というのは、ばらばらのものです。そのままではまとめて読めないようなばらばらのもので、後の時代の人たちが何とかそれを読もうとすると、それを要約して要らないところは削って、そして何とか診察、鍼の刺し方なりの診察と選穴をくっつけるという風にやるしかないわけですね。

## 補瀉

2000年前に『素問』や『靈枢』が出来た時に、『靈枢』の「九針十二原篇」の補瀉の文章はよくわからないので、仕方なく「鍼解篇」と「小針解篇」という二つの注解を作って『素問』『靈枢』の中に入れた。それらの篇の解釈に基づけば、「九針十二原篇」の文章は、ある程度はわかる。

もう一つ、「九針十二原篇」を元にして書かれたものが『素問』『靈枢』の中に四つあり、「離合真邪論」「八正神明論」「調經論」「官能篇」である。そこでは、難しい九針十二原篇の文章をやさしく解釈しています。まず、呼吸に合わせて鍼を出し入れする。息を吐いた時に鍼を刺し入れるのが補法で、吸った時に刺し入れるのが瀉法というものです。もう一つ、これは一番ポピュラーで、今でもよく使われています。鍼を抜いた時に穴を閉じるか閉じないかというものです。

深い、浅いという鍼の刺す深さ、刺した鍼の下が熱くなるか冷えてくるかということが、補瀉に関係あるんだということも、もう古い時代の文章（『靈枢』終始篇、『素問』鍼解篇、刺志論）に出ています。

灸法の補瀉というのは、『靈枢』の「背腧篇」に出ています。息を吹きかけて早くもぐさを燃やすか、燃やさないかというやりかたですね。これも後々まで使われています。ただし灸そのものが虚実ということを前提にしていないので、灸法の補瀉を書いてくれたのは結構なことですが、混乱する原因になったのではないかと思います。

補瀉というのは、体の状態によって補法をやっても瀉法になるということが有りますので、おそらく一穴にたくさんの灸をするのが補法になるのではないかと、いう風に私は思っています。『靈枢』の「背腧篇」にある早く燃やせば瀉法になり、自然に燃やせば補法になる。つまり灸はそのままでやれば補法というような事ですが、まあそういう風なものではないかなあと思うのです。

『素問』や『靈枢』の中にある非常に重要な診察法や、鍼の刺し方というのが、ことごとく無いというのが『難経』の特徴です。おそらく、それが後漢時代（AD25～220年）の頃の基本的なものだったのではないかと、いう風に思います。『素問』や『靈枢』にあって『難経』に無いという事は、『難経』の時代には、もう十分に理解できなかった、あるいはもう必要無くなった、のどちらかだと考えた方がいいと思います。



『難経』の補瀉というのは、手技のことがほとんど書かれていないというのが特徴です。『難経』七十八難にあります。『難経』の補瀉の特徴は、つぼを使っての補瀉です。手足の五俞穴というものを使うという方法が、『難経』の補瀉です。つまり選穴による補瀉です。これは選穴の補瀉ということでもいいのですが、実は補瀉の問題というのは、實際上、選穴の補瀉という風にまとめていいのかどうかという問題があります。選穴の補瀉で扱っている問題というのは、実は病態像を複雑化するというか、構造化して観るというのか、それまでは比較的単純であった病態像を陰陽五行説によって、たいへん複雑化するということが大きなテーマであった、という風に私は今思っています。つまり『難経』にある虚実補瀉論というのは、実際には病態の五行的な複雑化というようなものではないのかという風に思います。ですから『難経』を読んで、それをまともに受け取ると、病気を陰陽五行的に複雑に解釈してしまうという傾向があります。

『素問』や『靈枢』を読むと、どちらかという病態というものを非常にあっさり目に見える、たとえば細絡があるから細絡をとるとか、ここは硬いからここに鍼をするという、そういう何か目に見える、目に触れる、そういうものになりますね。しかし『難経』は病の構造化です。目に見えない構造的なものを、虚実と五行説によって見出すということですから、もし真剣にやってしまうと非常に複雑に病態をみると、そういう風になる傾向があると思います。

三国時代（AD220～280年）の補瀉というのは、『脈経』と『甲乙経（鍼灸甲乙経）』に引かれた『明堂』に出てきます。『脈経』では、こういう脈状の場合は補いなさい、または瀉しなさいということが出てきます。脈と言うのは、症状と同じでからだの病態の表れですから、脈というのは症状と同じなのです。

『甲乙経』の中に引かれた『明堂』、これを『明堂』と言っているわけですが、これに出てくる補瀉は多くないです。13条ぐらいです。『千金方（備急千金要方AD682年）』では9条ぐらいです。補瀉は『素問』と『靈枢』の中に手技によるものが論じられ、『難経』の中では選穴による補瀉が論じられていますが、『明堂』や隋唐時代（隋AD581～617年、唐AD618～907年）の本では、ごくわずかに主治条文の中に出てくるだけになったというのが現実だと思います。

補瀉というのは後漢時代（AD25～220年）に一度非常に重んじられ、その後あいまいになって姿を消して行き、やっと元明時代（元AD1279～1367年、明AD1368～1661年）になってから、『素問』『難経』の経文をひっくり返して、もう一度元明時代の補瀉論を作った、というのが本当だと思います。補瀉論は後漢時代のものと、それを材料にしてもう一度、打ち立てた元明時代の補瀉論の二つがあります。

\*次回は、9月13日（日）『六元正紀大論篇 第七十一 第六十二章』からです。  
（素問勉強会世話人 東大阪地域 松本 政己）